

〈書評〉

北野収・西川芳昭 編著

『人新世の開発原論・農学原論
——内発的发展とアグロエコロジー——』

多様性と共生, そして命のつながりの視点から読み解く

植木 美希[※]

Miki UEKI

開発・発展とは何か——アフリカに思いを寄せる

先日、某大手商社ギャラリーで開催されている「和フリカ展」を見に行ってきた。公開前の内覧会という貴重な機会だった。内容はカメルーン出身のアーティストが日本の着物や漆の文化つまり「和」と作者の育った地元アフリカの伝統的文化を融合させた新しい感覚の作品展であった。アフリカの文化にも日本の着物や漆などとの組み合わせが違和感なくとても素敵なお作品に仕上がっていたのに驚くと同時に感動を覚えた。とはいえ主催者は日本を代表する大手商社であり、世界各国で開発を進め、日本の経済成長に貢献してきた側である。その商社の開発事業の詳細について執筆者は詳細を知らないが、本書でいうグローバル資本や国家権力などによる他律的な開発である「天動説」ではなく、グローバル資本であっても地域や人々の主体性を重視した「地動説」的な開発であることを願わずにはいられない。

現在はインターネットの発達でグローバル化が一層加速し、自身が入手したいと思う世界中の情報は瞬時に入手できる時代になったと言っても過言ではな

※日本獣医生命科学大学名誉教授 Professor Emeritus, Nippon Veterinary and Life Science University

いだろう。とはいえ、一庶民の感覚では、アフリカは日本からは遠いし、南米も遠い。輸入された農産物、たとえばコーヒーを飲んだり、チョコレートを食べたりしても、美味しいコーヒーやチョコレートの味や香りの違いや価格には思いを馳せやすいが、そのコーヒーやチョコレート原料のカカオの生産者にはなかなか思いがいかないというのも真実だ。また日本で人気のある鳥の唐揚げの原料の鶏肉がブラジルやタイなどで多く生産されていることもどれだけの人が認識しているだろうか。日本を含めて世界での食肉消費の増大が熱帯雨林の破壊につながる「天動説的」発展を助長していることも含めて、そのような情報は十分には知らされていない。少々古くなるが、私の好きなドキュメンタリー映画に「美味しいコーヒーの真実」がある。エチオピアのある地域のコーヒー生産者組合連合の代表者が地域のコーヒーの品質を向上させ、イギリスなどでの公正貿易を実現するために奔走する物語だ。キリマンジャロの美しい緑や苦勞する農民の暮らしが鮮明に描かれ、代表者の情熱と切ない思いがひしひしと伝わってくる。実は、この映画を見て、登場するイタリアの某コーヒーの大ファンになった。素晴らしい映画やアートはこのように一瞬にして物理的そして心理的距離感を無くしてしまうパワーを持っているが、本書もこのようにさまざまなことを思い出させ、考えさせてくれる不思議なパワーを持っているように思われる。学会誌の書評には相応しくない表現かもしれないが、本当に不思議な本である。本書を読むとアフリカや中南米の生活が一気に近くなる。それは、本書がアフリカや中南米の問題を現地でのフィールドワークをした実務経験者の視点から書いている章が多いからであろう。

取り上げられている国は、アフリカ（モザンビーク、タンザニア）、アジア（ネパール、日本）、北米（カナダ、アメリカ）、西欧（フランス、イタリア、イギリス）、ラテンアメリカ（メキシコ、中南米）と多岐にわたっており、第8章のタイトルにあるようにまさしく時空を超えている。アフリカの記述から始めるのは、「第I部 あの国、あの人たちは『遅れている』のか」の「第1章 モザンビーク農民の生活世界に見る性・生計・裁判」で語られる調査地リマオの女性たちの話「加入儀礼」や母系相、そして妻方居住婚などの話にかなりインパクト

トがあったからである。このリマオ調査の詳細が第1章に置かれていることにも納得がいった。実は、評者は日本獣医生命科学大学（日獣大）のダイバーシティ推進委員会委員長を長く勤めた。日獣大は学校法人日本医科大学のもとにあるため、日本医科大学とともに2019年に文部科学省の補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」、続いて2023年から同事業の「女性リーダー育成型」にも採択された。女性教員の研究環境の整備と本学における教授、准教授などの比率を政府の目標値以上に引き上げるといったものだ。ダイバーシティという言葉は知っていても真の意味でダイバーシティを女性教員とともに進めようという男性教員は多くはなく、事業の推進には苦勞した。世界中の女性は、ジェンダー格差をなくしたいと考えているのかとの思いが無意識にあったが、本書で紹介される話はあまりにも日本の現状とかけ離れており、第I部のタイトルにあるように「遅れているのか」、開発や発展とは何かを考えさせられる章である。

有機農業の運動と思想——評者の経験から

筆者が本書の書評を引き受けたのは、

第3章 貧困軽減と食料安全保障の手段としての有機農業——タンザニア・モロゴロ州での農家調査から、

第4章 日本の有機農業における贈与と脱商品化、後に続くコラム フランスのアグロエコロジー、

第Ⅲ部 内発的発展と食料主権

第6章 CSAの実践による越境する持続可能な社会形成——イギリスとカナダの現地訪問から——

第8章 時空を超えて越境する小さな農的連帯——CSAとフェアトレードのパイオニアたち——

のように有機農業に関する事例が多く取り上げられていたからである。

本書の根底に流れるのは社会を変えるのは有機農業を軸とした思想だ。評者は、有機農業の目指している思想とは、あるべき社会のあり方、経済偏重では

ない、ダイバーシティを尊重し、他者との共生による人の命のつながりを大切にしたい新しい社会の創造を考える。

評者が学生・大学院生だった70年代終わりから80年代は、有機農業運動が主婦の力によって目覚ましい発展を遂げようとしている時代であった。1974年には神戸の「食品公害を追放し安全な食べ物を求める会（求める会）」が誕生している。当初は薬剤をできるだけ使用しない鶏の飼い方をした卵の共同購入から始まっており、それは今から考えれば動物福祉（アニマルウェルフェア）につながるものであった。実際、安全な卵や牛乳は「求める会」に限らずよつ葉牛乳の共同購入グループや東都生協の設立に見るように運動の中核をなす食べ物であったところが多い。当時はインターネットのない時代であったが、農薬や化学肥料を使っていない安全安心な野菜や卵の評判は口コミで広がり、数年で神戸市だけではなく隣接する宝塚市や尼崎市加古川市等の広範囲に拡大し、勢いがあった。同時に会員も増大の一途を辿り、1500名は超えた。生産者との顔の見える関係を重視し、頻繁に産地にも援農や交流に出かけていた。その「求める会」の会員となって産消提携の理念を共同購入の実践を通して学び、運営のお手伝いもさせていただいていた。「求める会」の他の会にはない特徴の一つは、日本キリスト教団の所有する研修施設「神戸学生青年センター」の全面的なバックアップが大きかったのである（ここでは詳しく記さないが評者は編著者のようにキリスト教の信者ではない。しかし、個人的にはその後もキリスト教とのつながりは強くなった）。そのセンターで食品公害セミナーが毎月1回開催され、食料や農業問題だけでなく、環境や薬、医学の問題など幅広くさまざまなテーマでその道の第一人者を講師として招いて開催されていた。参加者も多かった。現在も食料環境セミナーとして継続している。折りしも兵庫県市島町で日本有機農業研究会の全国大会が開催され、その準備のため、毎週のように授業や実習もそこそこに市島町にも通っていた。有機農業研究会の設立者である一樂照雄氏にもお会いすることができた。埼玉県小川町の金子美登氏のところにも大学3年の時に伺って以来何度か出かけることになった。産消提携のまさにモデルともいえるべき素晴らしい方で最初にお会いした時は感動し、見惚れてしまっ

た。やはり小川町全体を変えるだけの情熱と力を持った方であった（お亡くなりになってしまったのがとても残念である）。全国の有機農業生産者も訪ねて、執筆活動を続けた折にも登場いただいた。全国の有機農業の現場で熱心に取り組んでいる方々とお会いしながら、評者は、この有機農業運動にもっと関わりたい、追求したいと思い、大学院に進み研究者の道を歩むことになった。その後、農林水産省の初の全国有機農業生産流通消費調査の仕事をするため東京に仕事を得た。当時、誠文堂新光社が『ベジタ』という月刊雑誌を刊行しており、そこにこのような産消提携の実践者たちの「いきいき有機ライフ」を連載させていただいていた。本書で登場する藤沢市の相原成行さんにも食生活研究会を立ち上げた浅井まりこさんのインタビューをしていた時に一緒にお会いし、お話を伺っている。浅井さんの行動力に感動し、食生活研究会から野菜をしばらく宅配便で送っていただいていたこともあった。このベジタの連載は、「日本有機農業の旅」（1992年、ダイヤモンド社）として出版した。海外のCSAの源流ともいえる産消提携をリードしてきた歴史ある消費者団体がここ数年で次々と解散していくのは、残念である。日本社会の女性の就業率の向上リンクし、専業主婦を中心とした団体がその役割を終えた面もあるが、その精神である本書で言うところの「食料主権」については、消してはならないと思うのは評者だけではなからう。また有機農業運動は近代以前の「伝統」や「自治」「共生」を参照点としつつ、さらに「内発性」を原点とすることによってのみ、求むべき「内発的發展」に帰着するものであると考える。しかし、次の日本での有機農業を担う主体が、今後、どうなるのかはまだ未知数の部分がある。それは本書の内容だけでは明らかにできない部分があるからであろう。

イギリスの経験とその後——CSAに期待する

評者は2005年から2006年に、編著者の西川氏が在外研究を行っている同じイギリスコベントリー大学で在外研究を行っていた。スーパーマーケットに出かけるとシーズン以外はケニアなどのアフリカからの野菜が多く並んでおり、学生さんたちもケニアの野菜産地の調査実習に出かけたりしており、イギリス

書評

とアフリカの近さを感じたものだ。本書に登場するガーデンオーガニックの施設は有機農業のワークショップ等やドライブで何度か出かけたこともある。取り上げられている2012年に設立されたCSA組織FACFは当然ながら存在していなかった。イギリスは歴史的にも、そして現在も動物福祉（アニマルウェルフェア）のリーダーである。有機農業もイギリス土壌協会の設立以来リーダーであるが、近年は経済の低迷でフランスやイタリアのような有機農業の伸びは見られない。このようなCSAの組織ができていくことに期待をしたい。

終わりに

本稿は書評ではあるが、かなり評者の経験に基づく内容になったことをお許しいただきたい。

2人の編著者と同時代を生きる研究者として共感するところが多く、結果として評者の経験を多く語ることになった。このように本書は読むことによって、自身を語ることのできる内容となっているのではなかろうか。開発原論・農学原論の書ではあるが、ダイバーシティと共生そして時空を超えた命のつながりの著作と位置づけることもできるだろう。どの章から読み始めても、手に取った読者の期待を裏切らないであろう。

[農林統計出版, 2022年, 272頁]